大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『欺瞞』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: マルロー, アンドレ, 天羽, 均 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010032

『欺　瞞』

アンドレ・マルロー
天　羽　　均訳

この小説を読んで，『悪魔(サタン)の陽の下に』のときよりもはっきりと，ベルナノスによって登場させられる人物が，彼らの性格のもたらす運命にではなく，むしろ彼らの性格が消えるその時点から始まる運命に従っていることが感じられる．作者にとって魂は人間の本質であるだけではない．魂はまた人間の本質をもっともよく表わすものなのである．『欺瞞』を要約することほど間違ったことはなかろう．事実には二義的な重要性しかないからだ．何より重要なことは，ある種の葛藤である．

『欺瞞』の真の主題は，ベルナノス氏のこれまでの作品の主題と同じもの，すなわち悪魔の力の研究である．この作品は，音楽的と呼ぶべき手法で構成されている．つまり‘人物’が小説の中に葛藤を持ちこむのではなく，葛藤が‘人物’を生じさせるのである．それゆえにこそ，ベルナノス氏は，彼が明らかにしようと望む感情を，他のどのような存在にもまして，強力に，明確に表わす司祭に執着するのである．

ベルナノス氏の書くこの作品の「クライマックス」が，氏の頭の中に登場人物が固まる前にすでに表われていたとしても驚かない．というのは，ベルナノス氏の，おそらくは無意識の技法は，普遍を目指しているからだ．セナブル師が信仰を失う情景は，少し変えるだけで，全く違った人物にもあてはまるだろう．わざと執念という言葉を用いよう．ベルナノス氏は危機を分析するのではなく，危機を描写する．まず人物の苦悩を描き，やがてこの人物を行動させる．そして，しばしば，その人物は自分がやろうとするまいと

思っていた取り返しのつかぬ身振りをしてしまったことに気づき，自分自身にも隠していたことを表に出してしまったことに気づく．ここに悪魔の働きかけが始まる．こうした過程は，小説の通常の過程とは反対である．そしてベルナノス氏の小説についての概念そのものが，今日もっとも共感を呼び，ほめそやされている小説の概念と対立するものなのである．『悪魔(サタン)の陽の下に』や『欺瞞』が，ベルナノス氏をまぎれもなく，同世代のもっともすぐれた小説家のひとりとする特質をそなえているにもかかわらずぶつかる抵抗は，この点にあると思える．作者は通常認められている現実には従わない．彼は，彼がつくり出した特殊な世界に住む．ときに彼は，うまくその世界の存在をわれわれに信じさせ，有無を言わさずそれをわれわれに認めさせることがある．それが成功したときは，目ざましく，深みにおいても力強さにおいても，現代のフィクションのもっとも見事なものに数えられるような情景（聖性の探求はもっとも巧妙な誘惑ではないのかと自問するドニサン師――シュヴァンス司祭の死）が読者の眼前に表われる．ときに失敗し，そうした章はパンフレットに堕してしまう．ところで，ベルナノス氏の内のパンフレット筆者は，幻覚の創造者にはとてもかなわない．彼の主要な才能，彼の作品の価値を生みだしているのは激しさである．ところで，雄弁家が間違っていれば，彼が強く叫べば叫ぶほど聴衆が困惑するように，ベルナノス氏は，彼が幽霊や，戯画的人物を非難するとき力が弱まる．

『欺瞞』の場面のなかに，ベルナノス氏がどのように現実を変容させるかの象徴的な例がある．それはセナブル師と乞食の出会いの場面である．このみじめな男の，きわめて力強い描写は，すこぶる非現実的である．不正確だとは言わないが，正確な事物の世界を逸脱している．そこには聖史劇の抒情的な場面（たとえばグレバン[1]の聖史劇のなかのユダの死の場面のような）のもつ弱さと力強さがある．私が音楽的創造と名づけるのは，こうした場面についてなのである．このような場面はセナブル師の肖像(ポルトレ)に必要であり，ベルナノス氏の小説に必要なものなのである．このような場面に虚偽があることを言い立てるのは簡単かも知れない．ベルナノスが描くような状況で問い

つめられたとして，どこの乞食がこんなふうに答えるだろう．ベルナノス氏の追っているのは，普遍的現実ではなく，その本質的特徴に還元された特殊な現実――それゆえにひとつひとつの異なる――クローデルが戯曲で表現するものに似た現実なのである．このような世界の表現がオペラでと同じように小説でも可能であろうか，これは当然論議の対象となろう．ベルナノス氏は，それが可能なことをわれわれに示す作家のひとりである．つねに成功しているとは思われないが，ほとんどつねに壮大さを感じさせるのである．

訳注

これは Nouvelle Revue française，1928年3月1日号に発表されたアンドレ・マルローの『欺瞞』についての書評である．以前に訳出した『田舎司祭の日記』への序文（訳文は本誌第12号，1978，所載）の注でマルロー自身が言及している文章にあたる．なおテキストは，Etudes bernanosiennes 15，1974，の *Notes et recherches* に収められたものを用いた．

1） Arnoul Gréban，1420-1471．聖史劇作家．